

法華經の陀羅尼における 女神について

ナレン・マントリ

大乘仏教を研究する上で陀羅尼の問題は極めて重要である。陀羅尼は色々な問題を含んでいるが、とくにその中の一つとして陀羅尼と女神の問題が挙げられよう。従来、經典にみえる呪文・陀羅尼は、その解釈が至難とされているが、陀羅尼の構造をみると、そこには色々な女神の名が呼格として用いられていることに気付く。しかも、それら女神の中には、印度における農業神や未開人の女神の名がみられる。このことは陀羅尼を解釈する上で、とくに注目されるべきである。

悲華經 (Karuna-Puṇḍarika-sūtra) にも法華經にみられるような陀羅尼がいくつかみられる。そこではこの陀羅尼のことを *Draṃi. dā-māntra-pada* あるいは *Drāvida-māntra-pada* と記されている。ドラヴィダは非アーリヤ民族で彼らの間では女神信仰が強かつことは、未だに南印度に残っている習慣やお祭りなどをみても十分明らかである。

法華經の陀羅尼の中に農業に関する女神の名前が確実に分かっているものと二つある。一つは *Sama* (沙履)、もう一つは *Arada* (阿羅難) である。Sama の女神はヒンドウ教の *Paraskara Gṛhya-Sūtra* (2-17-10) の中で他の女神と共に説かれてゐる。又 *Arada* の

ことも *Gobhila Gṛhya-Sūtra* (4-1-29) の中にみられ、農作業の始にこれらの女神たちに供養すべしとされている。その他、未開人の信仰と関係があると思われる女神の名前も法華經の陀羅尼の中に数多くみられる。その例として *Gauri* (瞿利)、*Candālī* (旃陀利)、*Maṅgali* (摩登著)、*Pukkasi* の名が挙げられる。*Gauri* という女神はもとも農業関係の女神であつて、今日でもヒンドウ教のシバ神の配偶神として祀られてゐる。*Candālī* は *Candāla* という未開人と関係のある女神であり、*Maṅgali*, *Pukkasi* も同様である。

Candāla, *Pukkasa* 等が当時、低いカーストと考えられていたことは色々な仏教經典を見ても明らかである。*Laṅkāvatāra-sūtra* (楞伽經) (8-14) に肉を食べる者は、くりかえし低いカーストの *Candālī*, *Pukkasa*, *Domba* の家に生まれると説かれてゐる。

法華經の中で *Rakṣasi* たちに説かれた *Tri me iṃ me iṃ me* (伊提履伊提履) という陀羅尼がある。テキストでは *iṃ* と *me* は離れているが、本来は *iṃ me iṃ me* というにして呼ばれていたと考えられる。陀羅尼全体の構造を見てもそれを推定出来る。その意味は *iṃ ma* 即ち *iṃ ma* といふ呼びかけの意味である。これに次び *Niṃ me* 「泥履 *Niṃ ma* 即ち *iṃ* という文句がみられることからしてもこのことは明らかであろう。楞伽經の陀羅尼の中に *Niṃ ma* の他に *Himā* と *Yama* という女神の名前が出て来る。*Svapākṣarā Prajāpāramitā* 陀羅尼の中にも *Avama* 女神が現われて来る。

南印度では今日でも色々な *Amma* という女神を祭る習慣が残つてゐる。*Amma* は母という意味である。女神を母として信仰する習慣が昔からこの地域に伝わつており、また南印度の *Drāvida* の間でも特に低いカーストの間で *Amma* を母として祭る習慣が今

も残っている。例えば Mallamma や Ellamma は今日でも非バラモン Dravida 人の間に信仰されている。

この陀羅尼が Rakṣasi たちによつて説かれたとなつてゐるが、Rakṣasa (羅刹) という言葉も印度の文学を見れば非アーリヤ人のことを意味することは明らかである。

こうしたことから陀羅尼と未開人(非アーリヤ人)の關係は明らかであり、こうした非アーリヤ人や未開人の信仰がいつどのような過程を経て仏教に入つて来たかも知えねばならない。その前に農業と女神信仰の關係について述べよう。

最近の文化人類学の研究に依ると、比較的初期に属する人間社会は、概ね次の四つに区分されるといふ。即ち——(1)未発達の狩猟社会 (2)かなり発達した狩猟社会 (3)牧畜社会 (4)農業社会

牧畜経済社会における支配は男性に依存しており、一方農業経済社会においては女性がその支配権を有している。その例は今日でも印度に見られる。

従つて牧畜社会を代表する神々は主に男であり、初期農業社会を代表する神は全て女が支配的であつたということが指摘されている。それを印度についてみると、初期ヴェーダ民族即ちアーリヤ人の経済生活は牧畜を主としたものであり、一方非アーリヤ民族のそれは農業を主としたものであつたといえる。従つてアーリヤ民族文化は父権制に基づいたものであり、男の神々が支配的であつたが、一方印度に深く根を下ろしていた非アーリヤ民族文化は主に母権制に基づいたものであり、女の神々が支配的であつた。

大乘仏教は本来アーリヤ文化に属するものであり、従つて男の神々が支配的であつたことは当然といえよう。法華經における“Pañca

法華經の陀羅尼における女神について (N・マントリ)

sthanāni stri adyāpi na pāpnoti.”(女人身猶有五障) 思想をもつてもそれを推察できる。要するに、陀羅尼や呪文に採り入れられてゐる女の神々の起源は母権社会を構成する非アーリヤ部族及び農耕を主義とする低カースト属に求められる。先に述べたように法華經陀羅尼にはこのような非アーリヤ部族や低カースト種族の信仰する神の名や農業女神の名が数多くみられる。

呪術や密教の起源もまた、彼等の農作物豊産の儀式に求めることができる。この農産儀式は非アーリヤ部族や低カースト種族に大きな影響を与えており、女神に対する信仰は彼等の間では一般的なものとなつてゐた。それが仏教、さらにヒンドウ教に採り入れられたに相違ない。

世俗的な習慣や呪文を採り入れ、それを宗教化する。この教えが法華經の中にも入つてゐる。S. P. の Dharma bhāṣakamūṣṣā-pa-rivarta (法師功德品) の中に次のような文句がある——“ye kecillā-ukhikā lokavayahārā bhāṣāni vā mantrā vā, sarvaṇ tan dharmānyena saṁsyaṇḍāpīyati.” どのような世俗的な習慣や俗説や呪文があつても、彼はそれらのすべてを教えの体系と調和させるのであろう。

即ち大乘仏教は、それ自体の拡大・発展をとげていく過程において非アーリヤ部族及び低カースト種族との接觸をふかめ、彼らを仏教に同化していく必要性から彼らの呪文や神々をも採り入れざるを得なかつたといえよう。しかし、それは仏教的含みをもたせることによつて仏教化されたと考えられる。陀羅尼はその背景を示す好例といえよう。また陀羅尼におけるいくつかの語が意味をもつていないといふことも、以上のような歴史的背景に因つてゐるといえよう。